

VIVIDSKY BADMAN

written by HADEYA

UNKNOWN SOUND

1

目が覚めた———アメリカのホテルで。

何か、が可笑しい。何か、が……。それとも可笑しいのは俺の頭か???

音が聴こえる。部屋の中央から。何とも形容し難い未知のサウンドが。
同時に冷気を感じる。あたかもゴーストが室内にいるかのような。

今日は〈何か〉が起こる。胸騒ぎがする。

トム・ヨークは洞察を得た。その時、テーブルの上のボールペンが転がった。
同時にピキピキと言う未知の音。音が瞬く間に室内に広がって行く。

「まさか……」

ヨークは確信に至った。今日、〈何か〉が起こる、と。

トンデもない何かが起こる。今日。

何が起こるかは大体、見当が付く。未だかつてない未曾有の猛威———

氷河期が来る、氷河期が来る。

DESAPEAR TRAIN

1

街では噂が上がっている———家畜用排卵促進剤なるセックス・ドラッグが水道へ撒かれている、と。日本政府による少子高齢化対策の一環だ。

産めば、若者が増える。高齢化問題を解決できる。安易な発想。

しかし政府は知らなかった。薬物の副作用を。家畜用排卵促進剤が睾丸のスペルマに頑丈な〈牙〉を与える事を

……。

*

私の名は、ノゾミ。最近、愛する我が子を失った。自分を見失い、迷走したが、何とか復活を遂げた。

以来、私は全力で突っ走った。

〈鬼才会〉と言う名の信仰宗教に入り、瞑想を身に付ける。薬物塗れの腐敗組織だったが、彼らを一切、寄せ付けなかった。ご法度である脱退……夜逃げを敢行し、今に至る。そして今、私は夜行列車に乗っている。

乗客も疎らの車内で北国を目指す。寒い寒い北海道を。巧くは言えないが、凍て付く吹雪が欲しかったのだ。

車窓を眺める。電車がトンネルに突入する。景色を見ながらからの未来に想いを馳せる。

主人と別れ、我が子を失った専業主婦。自分が何故、生きるか考える。

電車が進む。出口へ向け。トンネルを抜けると、そこは——

一面の地獄絵図だった。

予想していた〈雪国〉ではなかった。土砂降りの白い雨が吹き荒れているではないか。

この後、私は水質汚染の猛威と脅威に晒される事になる。

つまり突然の〈氷河期〉に。

大自然の猛威の中、私は未知の黒い生物と出喰わす事になる。氷を噛み砕く獰猛生物と——

これから語るのは、特異な状況下における私の信じ難い体験である。

BADMAN NOT LOSE

1

ワイルド・ライフ——獣の生き様を知っているか。

銃弾も、既成概念も、速度限界も超え、なお力強く飛ぶ獣の生き様を。

それは鈍い輝きを放ち、戦闘能力を爆発的に高める。

今、一匹のブラックバードが飛んでいる。一直線に。激しく打ち付ける白い雨の中、一人の女性救助の為に。

彼女の名は、ノゾミ。希望と言う字を書く。何が何でも彼女を救う必要がある。

その鳥には〈使命〉があった。ノゾミを……世界の望みを見捨ててはならないと言う使命が。

黒い鳥の眼光は怒りに燃えている。ブラックバード。野獣の名は——

VIVIDSKY BADMAN。

外は、これまでにない異常な雨が降っている。
これまでに見た事もない白い雨。粘着質で異臭がする。この雨は一体、何なのか……。
そう思った矢先の出来事だった——氷河期が出現したのは。

冷たい空気が一瞬だけ温くなって、フェイドアウトする。超対照的に何も無い大気中に白い氷の壁が出来上がる。
あっと言う間にそれは……氷の壁は出来上がった。
その直前、車窓から一匹の黒い鳥を見た。
鳥は遠くから飛んで来て、氷の壁に激突して落下した。
一体、あれは何だったのだろうか……。

かくなるして、私は密閉空間に閉じ込められた。
周囲を見ると疎らな乗客は……〈氷柱〉になっていた。寒い……身も凍える寒さ。
どこからともなく甲高い男性の声がする——

「その場で待機しろ」
「……はい」
「俺が助ける。絶対に助けて見せる」
「あ、貴方は？」
「バッドマン。鮮烈な空から救助に向かう」

声は途切れ途切れだった。だが不屈の意志を感じさせる。
誰より強く、屈強な不屈の意志と燃えたぎる闘志を。

こうして私とバッドマンは意思疎通を終えた。

寒い……凍えそうだ……意識が朦朧とする。
朦朧とする意識の中、何やらガンガン音がする。

未知の音——氷を噛み砕く生物が接近する音。

「オマエを食ってやる——」

違う男の声が聴こえた。
「俺は目が見えない。奪ったのはオマエだ。ノゾミ」
「違う」
バッドマンの声が割り込む。
「ノゾミは世界に必要なだ。氷を噛み砕く生物よ、止めてくれ」
「止めるものか。氷もろとも噛み砕いてやる」

未知の音が接近して来る。私の元へグングン接近して来る。
氷を噛み砕く音。それは静寂を引き裂く、工業機械の大音量のノイズ……。

同じ頃、バッドマンは異空間を飛んでいた。
既成概念である死を、速度限界を貫通する野獣だけが垣間見る世界を。

救え、バッドマン。その使命は〈お前〉にしか全うできない。
氷を噛み砕く生物とVIVIDSKY BADMANの一騎打ちが始まろうとしていた——

世界のノゾミを賭けた、屈強と屈強の一騎打ちが。

FOR YOU

1

私は気鋭の小説家。〈ハデヤ〉と言う名前で活動している。
私はコーディングに日本の**JUST SYSTEM**社の欠陥ソフト〈ホームページ・ビルダー〉を使っている。
このソフトが原因でシステム・クラッシュは起きた。たった今。

彼らは脅迫して来た。**DARK DRAGON**が周知していた事実を公開されたくなければ、**10~500億**を払え、と。
さらに彼らは**DARK DRAGON**のメンバー間の通信をブロックしている。いつでも廃刊に出来ますよ、と言わんばかりに。
会社経営をすれば、映画制作に支障を来す。トム・クルーズは苦渋の決断を下した——

GOOGLEを買収する。買収し、水面下で動く。

*

氷を噛み砕く生物がノゾミの元へ接近する。
ノゾミは**DARK DRAGON**の一員だ。メラニアに成り済ました〈ヒトミ〉に命じられ、人類の為、自らの両目を繰り抜いた。

彼女が発した言葉は悲鳴でなく、「やってやったわよ」だった。

その後、神となり、両目は再生された。

それでもシステム・クラッシュは避けられない。宇宙規模での前代未聞のインフラ破壊。タケハルテラウチを含む多くの者が世界終焉作戦.....宇宙征服計画に関わっている。

まずハデヤが雑誌〈DARK DRAGON〉を立ち上げた。クラークン氏はシステム・クラッシュの時期を彼に伝え、犠牲となった。殺ったのは、ヒトミだ。

この事実に一匹のBLACK BIRDが立ち上がった。VIVIDSKY BADMANとなり、世界を救うべく単独行動を開始する。

ハデヤに懐疑的だったトム・クルーズも英断を下すのである。

我々、DARK DRAGONは依然、通信網がダウンしており、連絡が付かない。
我々は氷河期の中に閉じ込められている.....。

*

ブラックバードが行く。世界のノゾミを救う為、未来に望みを託す為。
邪悪が結託する。連中の汚れたエゴとプライドが集合体となり、ノゾミに向かって突進しているのだ。

*

ハデヤはJUST SYSTEM社の代表に連絡を取った。SOS。
彼らの回答はDARK DRAGONの通信を開通させる気はないとの事だった。敵でいる方が株式を含む経済効果に好影響があると睨んだのだろう。

GOOGLE買収と言う一大記者会見に臨むトム・クルーズと氷河期に閉じ込められた、DARK DRAGON。
世界の命運は一人のヒーローが握っている。VIVIDSKY BADMANが。

それは哀しくも美しい友情の物語。
そして善と悪の威信を懸けた闘い。この宇宙の完全決着。

*

目の前の壁が噛み砕かれた———万事休す。
「ノゾミ、お前の呼吸が聴こえるぞ。俺は目が見えないから氷を噛み砕く。音で何もかも分かるんだ。どうも、お前は死を覚悟したようだ」
ノゾミは氷を噛み砕く生物を見て、告げた。
「覚悟は出来ています。しかし、それは死に対する覚悟ではありません。私の覚悟は生きる覚悟です。過酷な現実をサバイブする覚悟」

「お前にサバイブできるか。弱肉強食の経済世界で、未来永劫に続く宇宙で」

「出来ます。私には仲間がいるからです。苦楽を共にする大切な仲間が」

「なら仲間ごと食っちまおう。最高の味がするだろうよ」

「今がチャンスです。VIVIDSKY BADMAN」

VIVIDSKY BADMANが狭い車両へ飛び込んだ。人間氷柱を掻い潜りながら氷を噛み砕く生物に向かって突き進んで行く。

.....ノゾミの頬を一滴の涙が伝う。ノゾミはこの後の展開を知っているからだ。

自らの眼球を繰り抜いた際、フラッシュ・フワードを見た。盲目になる人類、永遠の窒息を喰らう人類。

高笑いするヒトミと悪のシンジゲート———サタン。

バッドマンが奇襲を掛けた。氷を噛み砕く生物は余裕だ。余裕でバッドマンの攻撃を回避している。考えれば分かるだろう。体格差が違う事に。

バッドマンは助からない事が分かっているながら決闘に挑んだのだ。

それは鳥類からDARK DRAGONへのメッセージ。

世界の為に闘え、と言う.....ノゾミを見捨てるな、と言うファイナル・メッセージ。

バッドマンが闘っている。懸命に。

ノゾミは涙を拭った。この闘いを最後まで見届ける必要がある。

不屈の精神と燃え盛るパッション。世界にく炎)を与えるべく、VIVIDSKY BADMANは闘っているのだ———

DARK DRAGONの一員として。特攻隊長として。

NEED SKY

1

その時だった。氷を噛み砕く生物がバッドマンに致命傷を与えたのは。

敢え無く、バッドマンは倒れた。

*

バッドマンは空を飛んでいる。澄み切った春の大空を。

空を舞うのは心地良い。とてもとても心地良い。

私は空を舞う事を愛している。自分がBLACK BIRDである事に誇りを抱いている。

バッドマンが落下する。どこまでもどこまでも落下して行く。
グッタリした身体で落下して行く。ピクリとも動かず、ただ落下して行く。

夢を見た。初めて空を飛んだ時の夢を。

私は怖じ気づいていた。そんな私を見て、父が言う。私は飛ぶ秘訣を尋ねた。

「空を飛べる訳がないよ、父さん」

「飛ぶ事は挑戦だろう。人生は挑戦の連続だ。ハードルが高ければ高いほど、成功率は低くなる」

「.....もし飛ぼうとして、飛べなかったら？」

「もう一回、挑戦すれば良い。だろう？」

父鳥は言った。経験豊富なのが息子にもダイレクトに伝わって来る。

「失敗したら、もう一回、トライすれば良い。失敗から.....ダメージから学ぶんだよ、ライフは」

「ライフって、何？」

「答えは自分で見出すんだ」

僕は.....私は飛んだ。大空を。その時、私は知った。ライフとは何か、を。それは自分自身の限界への挑戦なのだ。

果敢に挑み、不屈の精神で飛び続けるのだ。広大な空を。

意識を戻し、バッドマンは目を開いた。そして思い出した。何故、自分が落下しているか。

私に欠けていたモノは、戦術。そして勝利に賭ける執念。その点で氷を噛み砕く生物に敗れたのだ。

では戦術とは何だろう。執念はどこから来るのだろうか。

答えは、志だ。そして信念だ。

それを得た時、俺は飛べるようになる。死から復活し、〈フェニックス〉となる。

古の言い伝えでは鳥種族の〈誰か〉が不死鳥.....つまりフェニックスになると言う。

伝説の鳥、フェニックスに私は憧れた。フェニックスになって、ライフを謳歌したいと。永遠に謳歌したい、と。

だからこそ私は誰よりも飛ぶ練習をした。いつしか私は飛べるようになり、その実力はナンバー1になった。

ある時、たまたま〈DARK DRAGON〉と言う雑誌を読んだ。

DARK DRAGON.....私はその雑誌に暗黒龍を見た。ヒント——私が見た暗黒龍は〈影〉だったのではないか。

フェニックスの影であったのではなかろうか。

.....私はこんな風に生きたいと思った。媚び諂う事なく、社会悪をなぎ倒して行く編集長のよう。ハデヤのように。ハデヤのスタッフや彼の上司のように。

そして私はVIVIDSKY BADMANとなった。更なる果てなき大空を目指し。
ライフは困難だ。だからこそ俺は挑む。挑み続ける。
もっと広大な空を飛びたいと願うからだ。

幸い、私には辛うじて気力が残されている。だとしたら、やるべきは一つ——
夢、追い求める事だ。

そこに私は願いを込めた。人間と鳥類の共存共生と言う願いを。
それが私がVIVIDSKY BADMANと名乗る所以だ。

VIVIDSKY BADMANは負けない。決して負けない。

その根底にあるモノは純粋な願い。世界平和と言う名の万人の希求だ。私は……
「負ける訳には……行かない……」
バッドマンは力を振り絞った。自分の持てる力の全てを、ありったけの力を振り絞った。
そして蘇ったのだ——

不死鳥……フェニックスとして。

私はノゾミを救う。それが全ての鳥類の……私自身の願いだからだ。

次の瞬間、バッドマンは突進した。氷を噛み砕く生物に向かって。結果は——

THANK YOU VERY MUCH

1

バッドマン。VIVIDSKY BADMAN。彼の嘴は屈強の敵である〈氷を噛み砕く生物〉の胴体を貫いた。

——人間の愚かさ起因する環境汚染、利益追求の結果、生まれる生態系への悪影響。

バッドマンは、たった一人で倒したのだ。そして言う。

「貴女を助けに来ました、ノゾミさん……地球最後のHOPE」

ノゾミはきっぱりと告げた。

「逃げて下さい」

「その必要はありません。私は主張すべき事を主張しました。後は……責任を取ります」

ノゾミはバッドマンを見ている。バッドマンもノゾミを見ている。意思疎通が図られる。

ノゾミが告げた———真実を。

「あなたは追われる事になるでしょう。結果として、それは鳥類に損失を齎します」

「何故———」

バッドマンは核心に触れた。

「———人間は理解を示さないのでしょうか？」

「浅ましき存在だからです」

バッドマンは溜息を吐いた。けど、すぐ穏やかな口調を取り戻した。

「私は……私は……」

泣いた。バッドマンは泣いた。その涙の意味が分かるだろうか？ 人間は何故、鳥類を撃つのだろうか。何故、人間は鳥類を食すのだろうか。

生態系や食物連鎖が理由だと言うのなら、その逆だって、あり得る筈だ。

私たちは何か悪い事をしたのか？ 私たちは前世で世界破壊を試みたのか？

違う。断じて違う。俺たちは射撃場的じゃない。俺たちはフードではない。

俺たちは〈命〉だ。命を弄ぶ権利がどこにある？ 答えろ、人類。私たち……俺たち鳥類を迫害する如何なる権利がある？

正当性は鳥類にある。否定できないだろうよ。

「空は一つです。過去も現在も、未来も空は一つです」

バッドマンは涙を拭った。

「……何が言いたいのですか？」

「鏡を見た時、その者はコンマ何秒か過去を見る。と言う事はジュラ紀への行き来は可能だと言う事です」

「……」

「光より速い速度で移動した場合、光子の在り方は変わる。そして光子は宇宙の全てと連動している。理論ではなく、真理です」

不可解な会話に沈黙が続く。不自然な沈黙が。バッドマンは尋ねた。

「……あ、貴女は何者ですか？」

「神。光より速い速度とは能力限界の事。その先にあるモノは方程式＝高速度グラフ。つまり———」

「我々は自由を獲得できる……」

「現在が存在していると言う事は過去は実在していたと言う事です」

「通常、過去は消えるのでは？」

「連続性。これは客観的事実です。では連続性は何で成り立ちますか？」

「刹那」

「つまり時間単位には最小値があると言う事です。最小値があるのであれば、エントロピーは分解可能です」

「……申し訳ございません、難しく理解できません」

突然、ノゾミは透明人間になった———光学迷彩に。

「粒子の状態を変化させれば良いのです。NEW CODEで。私は全鳥類へのCODEのアクセス権を付与します」

「あなたは——」

轟音がした。氷河の崩壊が始まる。

ノゾミは言った。

「一刻も早く逃げて下さい。バッドマン、早く」

訳が分からないままバッドマンは、その場から立ち去った。

既に氷河は消え、ノゾミの目の前には鮮烈な青空が広がっていた——VIVID SKYが。

バッドマンは飛翔しながらドンドン身体が軽くなるのを感じている。やがて透明になり、コンピュータ・グラフィックスになった。加速し、なお猛烈スピードで突き抜ける。そしてドンドン姿が赤く染まり、炎となって行く。伝説のファイヤーバード——フェニックス。

光のゲートが見える。フェニックスはゲートに飛び込んだ。その向こうに広がっていたのは、かつて見た大空。人間のいないジュラ紀の空だった。

*

ノゾミの身体が宙に浮く。どうすれば飛べるか。ノゾミは知っている。既に思考が飛躍しているからだ。

この時、ノゾミは意を決した。

兼ねてか計画していた〈反政府レジスタンス〉を結成しよう、と。

鳥類でも、馬でも、何でも喰っちまう人類社会に立ち向かおうと。多様な種の共存共生を夢見て。

ノゾミは上空を仰ぎ見た。そこには鮮烈な青空が広がっていた。(了)

キリミハデヤ

hadeyakirimi@gmail.com

81-080-9832-0574

モリカワケンタロウ 口座番号

三井住友銀行(店番号232) 普通口座 口座番号:7342872